

Lineria

白燐亂

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人間は魔神に滅ぼされるかに見えた。

それを救つたのはたつた一人の魔導士だつた。

彼は“魔法帝”と呼ばれ伝説になつた――。

そして時は立ち、最低最悪の魔法騎士団に魔法帝を目指す少年が入団してきた。

目

次

魔宮編

ページ10	ページ9	ページ8	ページ7	ページ6	ページ5	ページ4	ページ3	ページ2	ページ1
54	47	43	38	33	29	24	20	12	1

王都襲撃編

ページ15	ページ14	ページ13	ページ12	ページ11
95	85	78	69	61

ページ1

「へえ……君たちが今年の新入団員……？」

「もつと……速く！もつと……強くッ!! 加速して威力を高める……！」

名前 アイリス・ノートン

性別 女

年齢 17

所属 黒の暴牛

階級 五等下級魔法騎士

誕生日 5月2日

星座 牡牛座

血液型 A型

身長 158cm

好きなもの お菓子、掃除、高い所、猫

出身地 王貴界

魔法属性 炎

髪型 オレンジ色の髪を白いリボンで纏めている
瞳の色 エメラルドグリーン

ステータス

身体能力	2
魔力量	4
魔力操作	5
魔力感知	3
機転	3
人間不信	5
人物像	

平界のとある街のストリートチルドレンだつたが、ヤミとフィンラルに発見され13歳の頃黒の暴牛に保護という形で入団。15歳の時に正式に団員として入団。ペットに猫のムーラと言う猫を飼っている。

性格は、人間不信。自身が信頼するに値すると思つた人間に對してはフランクに接するがそれ以外はニコニコと敬語で話す。

魔法（隨時更新予定）

属性は、炎。

全体的に攻撃魔法が多い。サポート向きの魔法も覚えたりしているが一部使い方を誤った魔法も存在する。

炎魔法

炎庭の猫

猫耳や爪、尻尾が体に現れ猫みたいに変化する。猫っぽい動きをしたり素早い動きや

5 感が発達する。

焰の円爆

両手に丸い形の炎を作り出し攻撃する。

創生魔法

炎槍

炎を纏つた槍を召喚して攻撃する

縛来の靴

くるぶし辺りまでを覆う炎の靴。スピードに特化しすぎたせいで攻撃力は皆無。壁

くらいなら破壊できるがそれ以上硬いものは壊せず炎庭の猫と組みあわせて敵の偵察

と隠密行動によく使う

拘束魔法
だんけいじゅつまほう
暖景桎梏
だんけいじっごく

相手を炎を纏つた鎖鎌で拘束する魔法。なのだが鎖鎌で攻撃したりしている

回復魔法
ひしやくのじゆつまほう
燈灼ノ城
ひしゃくのじろ

対象1人を回復する魔法、ただし回復には時間がかかるし使用中は無防備になると言
う弱点あり

以降、ネタバレ有り

生まれは王貴界にある貴族ハーミイ家の三女。好奇心旺盛で順応性が高い性格で虫
も素手で触るような子供だつたため親からは敬遠され兄弟からも遠巻きにされていた。

貴族らしからぬ行いをしていた結果「あそこの家の娘は虫を素手で触る」と言う噂が流れ家の面目を保つため10歳の時家を追放された。

追放された後は家を追放されたショックで人間不信となり平界のとある街でストリートチルドレンとしてゴミをあさり、盗みをしていたがヤミとフィンラルに発見され黒の暴牛に保護という形で入団。入団後は掃除や洗濯物の家事全般を担当し、掃除をする楽しさを知った。以来趣味に掃除が加わる。

15歳で、魔導書を授かり黒の暴牛に正式に入団。
17歳で、アスタやノエルが入団した。

ハーミイ家

王貴界にある貴族。

拘束魔法を得意とする一族で一族の傾向として炎属性の属性を持つ子供が生まれる。

子供の名前は花から取るのが伝統。
ヴァーミリオン家（フェゴレオンの方）と親戚関係にある

「黒の暴牛はお前に合っていたんだな」「妹に何かあつたら殺すぞ」

長男	
名前	デイジー・ハーミイ
性別	男
年齢	29
所属	金色の夜明け
階級	上級二等魔法騎士
誕生日	2月15日
星座	水瓶座
血液型	A B型
身長	185
好きなもの	兄妹、末の妹
出身地	王貴界
魔法属性	炎
ステータス	

身体能力	2
魔力量	5
魔力操作	4
魔力感知	3
機転	5
弟妹たちへの愛	5

「ねえ、お前ら帰るぞ」

「この空間を拘束した…！」

次男

名前 シヤガ・ハーミイ

性別 男

年齢 26

所属 紅蓮の獅子王

階級 中級三等魔法騎士

誕生日 4月27日夢

星座 牡牛座

血液型	A型
身長	169
好きなもの	魔法、国
出身地	王貴界
魔法属性	炎
ステータース	
身体能力	4
魔力量	4
魔力操作	5
魔力感知	2
機転	3
国への忠誠心	5

「ゴメンな、このバカな妹共が」
「お前らがやつたのか？」

名前 スターチス・ハーミイ
長女

性別	女
年齢	24
所属	紅蓮の獅子王
階級	上級四等魔法騎士
誕生日	4月29日
星座	牡牛座
好きなもの	辛いもの、団長（友人的な意味）
出身地	王貴界
魔法属性	炎
ステータス	
身体能力	5
魔力量	4
魔力操作	3
魔力感知	4
機転	5
正義感	5

「へえ…まだまだですわね。アイリスさん?」

「あら、すみません。いらしてたんですね、気づきませんでしたわ」

次女

名前 カトレア・ハーミイ

性別 女

年齢 18

所属 珊瑚の孔雀

階級 中級四等魔法騎士

誕生日 10月14日

星座 天秤座

好きなもの 自分、母親

出身地 王貴界

魔法属性 雷

ステータス

身体能力

1

魔力量	3
魔力操作	
魔力感知	
機転	2
妹への執着心	3 5
	5

ページ2

「う、うわわわあああああ!!!!」

「にや……?」

それはアスターが入団した翌日の朝の事だった。

1

朝早く目を覚ましたアスターはリビングへと向かっていた。昨日できなかつた案内をマグナがしてくれるためだ。待ち合わせ場所がリビングだつたため。

そして、ソファに座ろうとしたその時、モゾ、と動いた物体を見てアスターは止まつた。オレンジ色の髪にそれを纏める白のリボン、黒のローブを着て寝返りを打つその人物を見てアスターは思わず叫んだ。

「う、うわわわあああああ!!!!」

「にや……?」

「どうした!?

まず最初にマグナが

「何事!?」

次にバネッサが

「なになに?」

ラックが

「て、敵襲!?

フィンラルが

「なにごとよ!!」

ノエルが

「ブツブツブツ……」

ゴードンが

順に来てそれぞれ叫んだ。

そして寝転んでいる人物に目をやるとフィンラルが「おーい」と言い頭をポカポカ叩

きその人物を起こした。

「……？ フインラル？」

「そう、おはよう」

「おはよ……？」

眠気眼でフインラルを見るその人物は次に周囲の人物を見て「なんでみんないるの……」と小さく言った。

「そこの可愛い坊やが朝早くから叫ぶから何があつたのかしらって思つたらただ単に寝てた貴女に驚いてたみたいよ」

「坊や……？」

「そう、今年の新入団員よ。アスタにノエル」

そうバネツサが言うとアスタとノエルに目配せした。要は自己紹介しろ、だ。

「ハージ村から来たアスタです!!! よろしくお願ひしやアアす!!」

「ノエル・シルヴァアよ。」

「へえ……君たちが今年の新入団員……私、アイリス・ノートン。よろしくね、アスタさん」

「よろしくお願ひします!!!」

「よろしく頼むわ」

「うん、わかりました。じゃ、私部屋行つて寝てくる」

コクコクと船を漕ぎつつアイリスは部屋に戻つてしまつた。それを見届けてフインラルが口を開いた。

「アイリス、昨日は任務で帰つてきてそのまま寝てたみたいだね。」

「ええ…いい加減部屋で寝ればいいのにね」

「環境が環境なんだから無理つすよ」

フインラルがそう言うとアスターとノエルは首を傾げた。

「…？」

「ああ…アイリスつて少し変わつた環境で過ごしてたからね」

「変わつた…環境すか？」

そう言うフインラルの顔はどこか暗かつた。どことなく部屋の空氣も淀んでいる気がする。するとコツコツと威圧的な足音と共に団長のヤミ・スケヒロが現れ、新人二人とマグナにイノシシ退治を命じたのだつた。

「フインラル、アンタらしくないわよ」

「すみません、バネッサさん。」

「謝ることじゃないわ、誰だつてあんな話聞かされたら暗くなるわよ」

ソファに座りながら酒瓶を飲むバネッサの向こう側に座るフィンラルは未だに顔が暗かつた。

।

「お前ら、何しに来たんだ…!!」

「いや、君を保護しに…！」

「保護…？捕まえるの間違いだろ!!」

।

「はあ……」

アイリスは一人ベットに寝転び先程の反省をしていた。新入団員だという二人に対して思わず素つ気なくしてしまった。

「（どーしょーていうか、あれノエルさまだよね…）

ノエル・シルヴァ、王族シルヴァ家の末の娘でいとこを介して一度だけ見たことがある。キレイな銀髪を持ち兄弟は銀翼の大鷲に所属していた筈…

「明日からどーしょー」

すると部屋で飼つている猫のムーラが近寄つてきて腹の上に乗つた。こういう時は部屋の前に誰かいる証拠だ。立ち上がり、扉を開けるとバネッサがいた。

「バネッサ…？」

〔今から闇（ブラックマーケット）市行くわよ〕

バネッサに手を引かれリビングに行くと新入二人とマグナがいた。任務帰りなのだろう

「お、おかえり。」

「おう……」

返事をしたマグナもアスターとノエルも顔が暗い。只のイノシシ刈りだつたはずなのだが…？

「任務先の村で過激派か思想犯の犯行に出くわして倒したんだけど犯人が自害したのよ」

「なる程…ちなみになんで私連れてきたの」

それで浮かない顔をしていたのか、と納得しバネッサを見ると笑顔を浮かべていた。

何か良からぬことを企む時の顔だ。

「だつてさつきから浮かない顔してるもの。気分転換?」

「わかった、ちなみにアスターたちも?」

「ええ、ほら行くわよ」

連れてこられたのは平界の上部中央にある城下町キツカ。

訪れる者のはとんどが平界に住む平民でたまに貴族がその更にたまに下民が訪れる。

アスターは先程から物珍しそうにはしゃいでいる。一方、ノエルは関心がないのかすましている。

「ノエルさん、キツカは初めてですか?」

「ええ、こんな街来たこともないわ」

アイリスが話しかけるとノエルは目を見開くがすぐにすました表情になるが少しだけ顔が嬉しそうだ。

キツカの街で体力回復の薬草や消耗品の魔導具を買ったあとは目的の場所に行くのだろう。

路地裏の壁にバネッサとアイリスが入り、アスターとノエルも恐る恐る入る。そこは闇

市だ。

「危ないお店もありますが、効果がすごい商品とかおいてたりするんですよ」

それから4人は賭博場など様々な場所をめぐるとナンパされた。

ページ3

「おやおや、こんな場所にどうしたんだい？」

アスターと別れた女子3人はノエルの魔導具選びをしていると知らない男に声をかけられた。

「ここはあなた方のような美しいレディーが来るような場所じやない。道に迷ったのかな？魔法騎士団のエリートのこのオレが外に案内してあげましょウ」

「失せなさい、羽虫」

「消えてもらつても？」

「（え、ええ——）」

その後、アスターが来るもこのナンパ男基セツケは入団試験でアスターと戦った男だそうだ。するとお婆さんの叫び声と共に強盗が戦利品を盗んで逃亡。これをアスターが剣で止めたと思つたらセツケが強盗に毒を塗られた。

「炎拘束魔法　　〃暖景桎梏〃」

アイリスは魔法を発動すると炎を纏つた鎖鎌で敵を拘束した。

「バネッサ、ナンパさんは大丈夫?」

「ええ、一時的な刺激毒ね」

「そつか、じやあ私この強盗突き出してくるね」

「じゃ、私達は先に帰ってるわね」

バネッサの言葉に適当に返事をしたアイリスは鎖鎌を引っ張った。強盗が悲鳴を上げるが彼女はお構いなしに引っ張つている。

「あ。あれは……」

詰め所の近くまで来ると金色の夜明けのローブを着た団員を目にしたアイリスは少したじろいだ。別に金色の夜明けを見たからではないローブを着ている人物に対しても驚いたのだ。

「ディジー……兄さま」

王族と関わりのある家の長男、そして重度のシスコンがこちらに向かってきている。

「あ、アイリス:!!」

自分の名前を呼びながら来た彼に対しアイリスは Pruitt と顔を背け道を進む。が、兄

は諦めていないのか金魚のフンの如く付き纏う。

「デイジーさん!! いい加減にしてください!!」

「いや、君はアイリスだろ？俺の妹の」

「貴方のような貴族の方を兄に持つなど恐れ多いので!! 失礼します！」

半ばヤケクソで叫びデイジーを置き去りにする。詰め所に入り担当の魔導士に渡す。その顔は恐怖でいっぱいだ。

「キツカの街の闇市で強盗をしていたので連れてきました」

「お、おう。黒の暴牛にしてはよくやつたな。」

「そうですね、では失礼します」

「ああ……」

デイジー・ハーミイはアイリスが黒の暴牛に正式入団した時から彼女につきまとってきた所謂ストーカーの部類に入る人物だ。そのストーカーが逮捕されないのは一概に彼と血の繋がった兄弟であることそして互いの団長がそれを知っているから、という理由。はつきり言おう、迷惑である。

嫌なら嫌といえば言えばいいのに言わないのはこうやって構ってくれる人がいる、といふ自己顯示力の塊なのだろう。

「あ？構つてくれるなら甘えれば良いだろう」

「デイジーはいつも君のことを嬉しそうに話すんだよ」と、互いの団長は何時だつたかそう言つていたのを思い出した。ちなみにヤミは心底鬱陶しそうにウイリアムは嬉しそうに話していた。

「アイリス、少し茶でもしないか？」

「シャガがこないだ任務で大手柄を上げてな」

「スターチスは後輩に手ほどきをしててな」

「カトリアは少し無茶をして怪我してしまったんだ」

などと、強引に茶に誘い聞いてもいらない家族の話をしてくる兄に対しても表面上は顔を歪めるが内心嬉しかつたりする。

魔宮編

ページ4

「トリタロウだな！」

「いえ、シリヴァンタスシユナウザーよ」

「トリタロウ！」

「シリヴァンタスシユナウザー！」

後輩二人の言い争いの声をBGMに魔宮ダンジョンを進む。

先程のネーミングセンス皆無の言い争いはアスタにつき纏うアンチドリの名前の言い争いである。

「ていうか、トリタロウもシリヴァンタス…なんちやらも気に入つてないんだね。」

そう呟くアイリスはアスターの頭を突くアンチドリを見た。

カカカカカカカカカカカカカカカカ

「あだだだ何すんだトリタロウ…！」

「ほら見なさい！シリヴァンタスシユナウザーがいいわよねつ！ねつ！？」
〔黒でいいんじやない？〕

しゅばつ…!とラックの言葉に反応しアンチドリは翼を広げ後輩二人は絶句した。

「(か、かわいい…)」

】

数時間前

それは団長のヤミの一聲で始まつた。

「ハイ注目～～～ついさつき、新しい魔宮が発見されました。」

「魔宮んんんん!!」

「マジっすかヤミさああん!!」

「うおおお!!」

「魔宮かあ……行きたいなあ……」

それぞれが反応を示す中アスターは一同を驚かす言葉を放つた。

「所で魔宮つて何ですか?」

「マジかてめえええ!!魔宮も知らんのか!?」

「何で驚いたの!?」

「いやノリで」

「バカのかなあ……」

「（き、聞いてたあ……！それもよりによつてノエルさまあ!?え、やばいすツゞく恥ずかしいんだけど……!!）」

「？」

「魔宮つつーのはむかーしの人間たちが遺した遺物が眠る古墳のようなモンで強力な古代魔法の使用法や貴重／＼な魔道具なんかが眠つてるスゲーとこなんだよオオ!!」

「うおおおおおお

「だけど当時の人たちが自分たち以外の人間に悪用されないようにとんでもない罠トラップ魔法を設置して超危険な面白い場所でもあるんだよ♪♪」

「うおおおお……？」

「その危険性の高さと邪な理由で遺物が奪われない為に常に魔法騎士団が調査してるのよ～ちなみにそこで頃垂れてる娘も魔宮に行つたことがあつて死にかけたこともあるのよ～～」

「ほうほう！」

マグナ、ラック、バネッサの順に説明をするとアスターは頷いた。どうやら理解したようだが最後のバネッサの言葉にアスターとノエルは一斉にアイリスを見た。

やめてくれ、そんな目で見ないでくれ

「そういえばそんなのあつたな、どこかのアツシ」君が慌てふためいて面白かつたな。」「面白くもないですよ、あん時なんか変な罠魔法発動したとおもつたら宝物殿に飛ばされて古代文字の解読方法のページ増えてあれから私只の便利屋扱いですもん」

ぶんすか怒るアイリスにヤミは豪快に笑った。今頃アツシ君がいれば頭を撫で慰めていただろう。

「なんだかんだで、頼られるのが嬉しーんだろ）

さて、特に今回の魔宮は非友好国との国境近くに出現した……ヤツらに奪われない為にもより確実な任務遂行が望まれる……」

その言葉に一同は気を引き締め顔を強ばらせる。特に新人二人は真剣だ。

「ちなみに過去魔宮からは文明のレベルそのものを変えちまう魔道具を見つけた者や最強の魔法使えるようになつた者もいたとか」

ヤミの言葉にアスターが「オレに行かせてくださいああい！！」と声を上げるとどうやら魔法帝がアスターをご指名だつたようでアスターを加えたノエル、魔の感知能力が上手いラック、偵察能力が高いアイリスが選抜され未踏の魔宮へと向かつた。

そしてアスター達が去った黒の暴牛

「何で魔法帝はアスターの事知つてんスかね？」

「あのダンナにはオレ達とは違うモノが見えてるからな・変人だし」

と、マグナの言葉にヤミが笑いながら答えるとバネットサが酒を飲みながら口を開いた。

「ノエル、大丈夫かしら〜」

「危険で重要な任務でこそ新人は限界を超える。ま、ラックがいるから大丈夫だろ。

アイツの魔の感知能力はズサ抜けてる。貴族以上だ。性格さえ破綻してなければどこの団でも引く手数多だつたんだからなア」

「その破綻した性格が心配ですけどねー。そしてその中に放り込まれたアイリスは大丈夫かしら〜」

「アイツは自分の役割を自覚して動ける人間不信だ。」

「団長、言つてることなんか矛盾してますよ〜」

ページ5

ガコツとラックが壁を押すと壁が抜けた。

そこはどこか神秘的な美しさを持つた空間だつた。

「すつ…すつげええええ!」

「魔法で空間が歪んでるみたいだね」

「どうしよう……ホントに来ちゃつた……」

アスターは驚き、ラックは感心し、アイリスは目が死んでいる。それを見てノエルが驚いている。そして呑気にラックが口を開いた。

「ココは外よりも濃～い魔が漂ってるねー」

「こんなに魔に満ちた場所初めてだわ…！」

「そうなのかい？」

ラックの言葉にノエルが続くとアスターがきよとんとして言つた。

「まさかアナタこれだけの魔を感じないの!?」

「全然」

「つてまさか、魔も知らないなんて言うんじや……」

「魔ぐらい知つとるわアア」

そんな会話をニコニコしながらアイリスは見守る。

「さて、そろそろ偵察を……」

炎魔法

“炎庭の猫”

偵察に必要な猫耳だけを発生させその猫耳の感覚を発達させた状態で魔法を発動する。

「私達入れて13人…そのうち敵は……6人、あと3人…2人は感じたことのある魔力…ミモザ…?」

呟いた声は誰にも拾われなかつたようで3人は罠魔法に先程から翻弄されている。と言うかラックがわざと罠魔法にひつかかっているだけなのだが。

「何やつてるの…?（…そういうえばミモザは金色の夜明け団に入つたつて聞いてるから…來るのは金色の夜明け…?）」

考えにふけっていたアイリスにラックが後ろから近づき声を掛ける。

「アイリス」

「はい、何用で」

「敵の正確な位置教えて!」

「敵は全員で6人、うち4人がここから近いです。」

「そつかあ!!」

淡々と告げるアイリスにラツクは笑顔で応え魔法を発動させた。

雷創生魔法　　“雷神の長靴”

「え?」

「ちよつと大事な用出来ちゃつた。とゆーワケで魔宮攻略よろしくーー!」

そう言うととんでもないスピードでその場を離れるラツクに後輩二人は啞然とし、アイリスは興味がないのかアスターの頭から飛び去つたネ口を追いかける。

「な、何考えてるのよ、あの人ーーー!!」

「かつ……かつけえええ」

「(本当は自分で強そうな相手いるの感知して知つてると、何でわざわざ他人に聞くんだろ)」

周りを物珍しそうに見渡すアイリスは二人から距離が離れているために植物魔法に捕まつた後輩2人に気づかない。いや、もう気づいていた。

「私が出たところで二人はなんとかするよね(さつきの偵察だと外に何人かいた。半分以上は敵だけど……1人馴染みのある魔力があつたなあ……)」

「うーわ、マジでアナタ達なんだ」
「さて、暴牛からアイリスも来るつて聞いて後輩たちの送迎に来るつていう名目で來た
けど、大丈夫かな？」
「が死んでいくアイリスは近づいてくる魔力に気づきそれまで下げていた顔を上げ、
顔を歪めた。コツコツと3人分の靴音が響きそして止まると魔導書のページを捲る音
が耳に届いた。

ページ6

「これで、借りを返したぞ。アスター……!!」

「ユノ……!!」

植物魔法の罠にかかったアスターとノエルを助けたのはアスターと同郷であり親友でありライバルのユノだった。

彼の後ろにはメガネをかけた青年と見覚えのある少女が控えておりメガネの青年が腰に手を当てユノに対して口を開いた。

「ユノ、なぜこんなヤツらをわざわざ助けたのだ。我々の任務はあくまでこの魔宮の攻略、つまりは宝物殿に速やかに辿り着くことだ。こんなヤツらにかかるつている時間などない……！」

「オイユノ！ いきなり何だこの失礼なメガネは！！」

「先輩」

「メガ…失礼なのは貴様だ！ 貴族の私と対等な口を訊くな！」

「ああ…リュネット家の」

アスターと金色の夜明け団、クラウスとユノが騒ぐ中ノエルと金色の夜明けの新人、ミモザが二人で話していた。

「私達、先日このメンバーでの任務で魔法帝に星を授与されましたの…！」
「オレ達だってこの前星もらつたもんね!!」

ミモザの言葉にアスターが胸を張つて答え、ノエルが済ました顔で髪を弄り、アイリスはふと疑問に思つたことをアスターに問いかける。

「ああ…初めての任務のあれですか？」

「はい!!」

アイリスの問いにアスターが元気返事をするとクラウスが口を開いた。

「ウソをつけ、黒の暴牛の新人ごときがそう簡単に星を授与されるワケないだろうが。今回の任務を任されているのもおこがましい」

「魔法帝直々に任されたつづーの！」

「また、見え透いたウソを……」

「ウソじやねえええ」

「まあまあ、アスターさんもメガネさんもうるさいですよ。敵がいるかもしれないのにそんなんに騒ぐと気づかれますよ。それに…………」

低レベルな会話が続けられてる中アイリスが二人の間に入り仲裁した、仲裁されてク

ラウスの眉間にシワがよりアイリスを睨む。そして不自然に言葉が途切れたアイリスをアスターとノエルが心配そうに見る。

「金色の夜明けに入っている貴族が下民に対し馴れ馴れしい態度を取るのは一族の恥では……？」

その言葉を受け取ったクラウスはアイリスをまたもや睨む。

「キサマつ……貴族の私を愚弄するか!!」

「あら、そんなつもりはないのですが……。」

アイリスが口元に手を当てクスクスと上品に笑うそれが相手を挑発しているのかはたまた天然なのか何れにしろクラウスはますます睨みを利かす。その姿にミモザが小さく反応した。

「つ……そりゃあ……！」

もはやヤケクソになりながら青年は言う

「貴様らは4人で来ていると聞いてたがもう一人はどうした?まさか、貴様らを置いて逃げ帰ったなどとと言うまいな。それとももう罠魔法の餌食にでもなつたか?」「(オレ達ほっぽつてどつか言つたなんて言えねー)」

「あ、あの……」

クラウスとアスターが揉める中ミモザがアイリスに近づき声を掛けた。その顔はどこか不安そうでそれでも嬉しそうな顔。

「ハーミイ家のの方ですよね？」

「つ……」

「ですわよね、あの後レオポルドさんや私達皆心配していました……」

「ミモザさん、……私はハーミイ家の者ではありませんよ。」

「ですがっ……先程のあの仕草スター・チスさんやカトトレアさんのようでした。私はいつも貴女のことを尊敬していました……見間違えるはず……」

「……人……違いですよ。そんなハーミイ家の方と間違われるなんて私もついてますね」
「アイリス……さん」

お互いがお互いの顔を見、背けることができず固まっているとクラウスがミモザを呼んだ。

「ミモザ……!! ミモザ!!!」

「は、はあい！」

植物創成魔法　　“魔花の道標”

クラウスに呼ばれハツとし返事をしたミモザは魔宮の構造を把握する魔法を発動し

た。その間クラウスはアイリスの顔を見た。

「（こいつ、デイジーさんに顔が似ているな。霧囲気もデイジーさん、いやスター・チスさんに似ている。あの人はいつも人を小馬鹿にし、相手をわざと怒らせるのが得意だと聞く。こいつも：先程は私をわざと怒らせた。黒の暴牛にこんな奴がいたのか）」

「この魔宮の大体の構造はわかりましたわ」

「ユノーー!!」

「はい」

ミモザの報告でクラウスはユノに命令をし、ユノは自身の魔導書を開き魔法を発動させる。

風創成魔法 天つ風の方舟

それは、人3人を余裕で乗せる風の舟、金色の夜明け団はそれに乗り黒の暴牛団を追い越していくた。

ページ7

「つて、どうするのよ!? 私達、探索系の魔法なんて使えないのよ!?

「しらみ潰しにすべての道を行くーーー!!」

「馬鹿じやないの!? このままじや宝物殿に行くどころか迷子になるわよ!? あと、貴女も手伝いなさい!!」

「あー、魔力感知下手なんですよねー（実は探索系の魔法使えるんだけどねえ……ま、だんちよーに新人しげこけって言わてるしもしもの時には助けますか……）」

「はあああ!? このままじや本当に迷子じやないの!!」

魔力がないアスター、魔法がろくに使えないノエル、使えるけど団長命令に従うアイリスたちは罠が発動しまくる魔宮を延々と歩いていた。するとアスターの頭の上にいたネロが頭から飛び去り翼を広げしゆばつと道案内をしてくれた。

「何、……」

ネロが案内してくれたのは重力が滅茶苦茶な場所。臓器が入った宝物をアスターが見つけたりと新人二人は興奮しながらも楽しそうに行動している。

「アイリス先輩…？」

「え、な、何？」

「先輩、何かあつたんすか？」

「どうして、そう思うんですか？」

「何か楽しそうな顔じゃないんで不安に思つただけっす!!」

「そ、そ、う……（ラツクが戦闘を開始した、それに金色の3人もラツクのところ以上の魔力の人と戦つて。私はどこに行けば……）

重力が滅茶苦茶な場所を抜けた3人は走つていた。

「よつしやアアー!!この道は行きやすーい!!」

「もしかして、本当にこの先に宝物殿が…!!」

ドオオン

「ラツク…！」

「何だ何だ!?」

「この魔力、おそらくラツクが何者かと交戦してる！」

ノエルの読みどおりラツクは今ダイヤモンドの敵と戦つている。

「マジですか！ 加勢しに行かねーと！」

「別に行く必要ないんじやないかしらあの人人が勝手な事してるだけだし。それに他にこの魔宮の宝物殿を狙つてる者達がいるのなら急がないと」

その言葉にアスタがグツ、と押し黙る。確かにと、ユノとどつちが宝物殿に行くか勝負をした。けれど仲間を助けたい、その思いがアスタを揺さぶるのだ。

「あ、あの!!」

「アイリス？」

「アスターさん、今この魔宮ではラツクが一人で戦つて。後は金色の3人が誰かと戦つています。

あなたは、どちらを助けたいですか？！」

「あなた、何を言つて！」

「本当なら…この先に宝物殿があります。そしてその付近で金色の3人が戦つて。攻略を優先するなら金色の方へ行つたほうが確実です。

でも、私にはどちらを選択すればいいのかわからない。だから、あなたに問います。アスターさん」

その言葉にアスターは顔を俯かせるがそれも一瞬だつた。するとノエルが声を荒げアリスに食いついた。

「ちよ、ちよつと待つて！あなた、探索系の魔法が使えるつていうの？」

「はい、だんちよー命令で新人二人をしごけつて言われてわざと言いませんでした。」

「使えるなら最初から使ってよね！」

「以後、気をつけます。」

「（ユノはきっと大丈夫だ!!そして俺は仲間を救いたい!!）

アイリス先輩!!ラツクのところへ!!」

その言葉に一瞬驚くアイリスだつたがすぐに魔導書を構えた。

「わかりました。私のこの魔法はスピードに特化し過ぎたせいで壁を破壊する程度の攻撃力しかありません。アスタさん！ラツクの所へついたら攻撃できる準備お願ひします」

「わかりましたああ!!!」

炎創成魔法　　“縛来の靴”

「アスターさん、ノエルさん！捕まつてください!!」

アイリスのふくらはぎを覆うように炎を纏った靴が現れ装着される。二人は言われ

たとおりアイリスに捕まると「行きますよ」と言う声でアイリスは宙を蹴った。
めまぐるしく変わる風景に二人は目を回るがそんなことはお構いなしにアイリス
はスピードを上げる。

そして猫耳が反応し、アスタに向かつて声を上げた。

「（この先にラックが……）この先にラックがいます!!」
「任せてくれます!!!!」

それを聞きアスターは剣を構える。スピードはそのままにアイリスの靴は壁を破壊し
て進んだ。ドコオンと到底女子が放つ音とは無縁の音を放ちながら壁を破壊しアスター
はアイリスから離れると敵の魔法を斬りつける。

「こりやまた、威勢のイイのが来たね〜〜、何だい君は……？」

「仲間だ!!!!」

ページ8

「いやあ〜〜、お仲間の登場とは参ったねえ」「オレ達が相手だ！オツサンんん！」

敵の言葉にアスタが反応し、答える。すると後ろにいたはずのラックがヨロヨロと起き上がり

「アイツは…僕の獲物だ……！」

僕が一人でやる……！」

「な……ちょっと何言つて……！」

ラックはそれだけ言うと敵に攻撃を仕掛けた。それを見てノエルが驚き、アスタらしくもない言葉を吐く。

「勝手にしろ……！」

「アスターさん……！」

咎めるようなアイリスの声を無視しアスターはその言葉を言うと同時に敵に向かつて走り出し敵の攻撃が当たる寸前のラックを助け、叫んだ。

「オレも勝手にアンタを助ける!!!一人になんかさせるかアアア!!!
アンタがオレをどー思つても知らん!!アンタはオレの仲間だ!!!」

その言葉を聞いたラック、俯いていた顔を上げるとその顔はさっきまでの歪な笑顔ではなく純粹な笑顔だつた。

「たしかに、みんなで戦つたほうが楽しそうだね♪」

「マズいね、どーも。こりやもうオジサンも本気で行くしかないね……!」

敵の煙魔法による壁がアイリス達を囲む。四人で固まるとアスタが叫んだ。

「誰が相手だろーとオレ達黒の暴牛が勝アアアアッ!!」

炎創成魔法

“炎槍”

「つて！埒が開かないよ!!」

それぞれの魔法で煙を攻撃するが埒が明かず、煙を吸うとクラクラする。現にアスタがその状態だ。この空間に長居いるのは得策ではないだろう。
「どーします、これ。」

煙を攻撃するのをやめ、ラックに問いかけるアイリス。するとラックは隣のアスタを

見て一つ閃いた。それを聞いたアイリスは笑顔を浮かべ炎槍を解いた。

「なるほど、それいいですね。私とラツクが敵を追い込むから後はタイミングを計つて二人に任せますね」

ラツクの魔力感知で敵の大体の居場所はわかつた。後はラツクとアイリスで敵を誘導する。

炎魔法 焰の円爆

雷魔法 迅雷の崩玉

アイリスの両手には丸い形をした炎が現れ、ラツクの腕から雷を纏つた球が煙をかき消すかのように攻撃をし、敵への牽制をそして仕上げは…

「(いくら、凄腕の魔道士だつて魔力のない魔道士には会つたことないでしょ)」

ラツクとアイリスが敵を誘導しノエルが魔力を絞り瞬間に魔法を発動し、それをバネに魔力感知されないアスタが攻撃する、それがラツクが思いついた作戦だつた。

「確かに大事だね、チームプレイ……！」

アスターの攻撃を喰らった敵を拘束しようと魔導書を構えたアイリス、ページを捲り構えたその瞬間

炎拘束……「あつ……！」

「アツ、待てオツサン!! 何その車!!」

「ちよつ、!?」

アイリスの拘束魔法よりも先に敵の魔法の展開が早く敵は魔法で逃走してしまった。

「くそオ〜〜〜、見失った……！」

「とどめを刺したかつたけどそれどころじゃないよね、宝物殿に行かないと！」

「アナタがそれ言う!?」

「そうだつたアア、とにかく行こオー!!!!」

元気な三人に苦笑しつつ続こうとしたアイリスは膨れ上がる魔力を感じ、頭を抱えラックの名を呼ぶと彼を感じたらしく魔力を感じる方向を向いた。

「つ、ラック……!!」

「どうやら、最強が他にいたようだね……！」

ページ9

仮面とは

それは演劇などで用いられる道具のこと

或いは

内面的な物を指す場合もある。

「あの子は、道化なんだ。出会ったときから」

その人はそう言つた。彼女は常に笑顔を薄く浮かべ相づちを打ち、決して本心を見せない。

それは見る人によつて印象が違う。

優しそうなイメージを抱く人や胡散臭いとイメージする人、恐らくそれは千差万別であろう。

「だつて、みんな他人だもん。他人なのに本心を見せて信頼を寄せるなんてバカバカしい。わたしには理解ができない。

他人との馴れ合いほどつまらないものはないでしょ」

―――

「この魔力……宝物殿の方、金色の夜明けの3人と交戦中?」

「だね、宝物殿なら急いだほうがいいね」

とてつもない魔力を感知すればその付近に先程会った金色の夜明けの3人の魔力も感じた。

「ユノが戦つてる!?

「多分、先を急ぎましょう」

アイリスの魔法にアスターとノエルがくつつき、ラックも自身の魔法を発動し、宝物殿へと急ぐ。

「この先、アスターさん!!」

「おう!!!」

魔導書から剣を出すとアスターは敵の攻撃を受けそうだったユノの前に立ち魔法を斬つた。

「おい、そこの顔色悪いの……勝手に手え出してんじゃねー、ユノはオレのライバルだ!!!!」

剣を構えアスターは敵にそう言つた。それを見てアイリスは顔を強張らせる。

「危機一髪って感じですかね……（ダイヤモンドの秘密兵器、確かにあの敵の魔道士はそういう言つてた。気を引き締めなきや……）」

「追いつけたと思つたら何やつてんだユノ、テメーこらあアア勝手にやられてんじゃねええーーー!!」

「余計なことを……もう少しで倒せたのに……」

「ええええ!? ウソつけエエ！ ボロボロじやん！ 今にも死にそーだつたじやん！」

「今から怒涛の反撃が始まるところだつた」

「ぜつてーウソじやんんん!! オマエそーゆートコあるよね

しようがねえーどつちが先にアイツ倒すか……勝負だアアア!!」

アスターとユノの会話が終わるとそれぞれが動き出す、ラックとアイリスはクラウスのところ、ノエルは怪我をしたミモザのところ、そしてアスターは敵に攻撃を仕掛けようとしている。

「ほいっ」

「はっ！」

ラックとアイリスがそれぞれ魔法でクラウスの前に現れた魔法を倒し、槍を片手にアイリスがクラウスに問いかける。

「キミ、大丈夫ですか？」

「私としたことが黒の暴牛に助けられるとは…………！」

ぐぬぬぬぬ、と頭を抱えるクラウスにラックは？を浮かべ、アイリスは「それだけ感情豊かななら平気ですね」とクラウスに向けて言うが当の彼は未だに頭を抱えて唸つている。

敵とアスターが会話をしていると敵は唐突に凄まじい数の自身と同じ姿の人形の魔法を発動した。

「な…………なんと言う数を同時に…………！」

「あちやー…………アスターさん！人形は私達が引き受けます！貴方は敵を……！」

「はいっ!!」

「貴様つ！何を…！」

アイリスに對してクラウスは噛み付くように言うが、當のアイリスは走つているアスターに視線を向けながら口を開いた。

「アスターさんなら、大丈夫。彼の魔法は防げませんから。それよりもこつちはこつちで仕事残つてますよ…！」

ようやくアスターから視線を外したアイリスは槍を握り直しそう言つた。それに対しクラウスは納得の行かない顔をするが彼はしばらくして戦闘を開始した。

そして敵の攻撃を避けながらアスターは敵に對し一擊を喰らわせた。

(強い……!!)

それはこの場にいる全員が同じことを思つた事だつた。

「ありえん！魔力が希薄な下民如きがこんな……」

「アナタさつきからつべこべうるさいわね!!魔力の無効化……それがアスターの能力なのよ」

「無効化……だと……？ただの幸運^{ラッキ}で能力に恵まれたつてことか……！」

「幸運かどうかは…見てればわかるわ！」

「オイコラアー！もう終わりかコノヤロオオー！！」

アスタの言葉にアイリスは内心ヒヤヒヤしながらも魔道士のページを捲り拘束魔法を発動しようとした瞬間、敵は起き上がり攻撃を仕掛けてきた。突然のことなのにアスターは剣で攻撃を斬つっていく。が、敵の魔法の攻撃を喰らった。

「アスターーー！」

ユノが叫んだ。すると敵は口を開いた。

「何なんだ？ オマエは…………！」

「オレは生まれつき魔力が全くない人間だ」

「魔力が全く無いだと!? やはり、運良く能力を得ただけ…………」

敵の攻撃を喰らつても起き上がったアスターは敵の言葉に対しそう返した。それを聞いたクラウスは嫌味を言つていたが、それは途中で途切れた。なぜなら彼は攻撃によつて破れたロープから晒されたアスターの腕を見たからだ。

「それでも魔法帝になつてみせる。それを証明する為にオレは生きている！！」

その言葉にクラウスは息を呑んだ。それは近くにいたアイリスも同様に。

どんな鍛錬を積めば年齢に似合わない筋肉がついた腕になるのか、彼と出会ったときからの疑問の一つだった。

人づてながらも、彼は魔法帝になる夢がある。と言っていたそうだ。それを聞いてアイリスは特に何も思わなかつた。否思つた。魔法帝には到底には成れないだろうし魔力がないのなら諦めて他の道を歩けばいいのに。そう思つてしまつた。

それはすぐに後悔に変わつた。

目の前でラックを助けるために必死で攻撃を仕掛けた彼を見て一瞬でもアイリスは思つたのだ。

「（彼なら……なれるかもしない。魔力がないのなら体を鍛えればいい。そう考えたのかな。……私には考え方なかつた……）」

一生懸命真っ直ぐにひたすら真っ直ぐに走る彼を見て、思つてしまつたのだ。
魔法帝になれるかも、と

「何事にも一生懸命あなたをわたしは尊敬するよ。
アスターさん」

ページ10

「オレはすべてを壊すだけだ……！」

「すべてを壊すだアー!? 魔法帝はすべてを守る存在だぞ!! そんなヤツに負けてたまるかアアー!!」

「邪魔だ……消えろ、石コロ!!!」

「石コロは石コロでもオレはアアダイヤモンドを碎く石コロだ!!!!」

敵が攻撃を仕掛けるよりも早くアスターの剣の攻撃が早かつた。攻撃は敵を気絶させるほどの威力を持ち、同時に敵の魔法の人形は敵が倒れたことにより停止し崩壊した。

「宝物殿に行くのはオレ達クローバー王国の魔法騎士団だアアー!!」

宝物殿の入り口でクラウスの拘束魔法により拘束された敵の周りを取り囲むアスターたち。

「動いて大丈夫なの？」

「だいぶ回復しましたわ」

「うおおお、オレのローブがアアア」

「帰つたらバネツサが直してくれるさ」

「これでよし……！」

「わたしの拘束魔法じゃあ、縛るだけですしねー」

各々が好き放題に喋る空間でユノは目が死んでいる。と、クラウスに対しアスタが疑問を投げかける。

「この拘束魔法、大丈夫か？」

「大丈夫に決まっているだろうが！手負いの者に解かれるほど脆くなどないわ！それにデイジーさんにお墨付きを頂いた魔法だぞ！」

「まあ、そうカリカリしなさんな。所でデイジーさんつて誰だ？」

「金色の夜明け団で古参のメンバーに入る実力者ですよ。王都に行く度にわたしにまとわりつく迷惑な方ですけどね」

「なっ！貴様、デイジーさんと知り合いか!!」

「あんな人、知り合いとは思いたくありませんけどねっ！」

心底羨ましいという表情のクラウスに対してアイリスはそっぽを向きながら言葉を

放つ。それを見てミモザは既視感を覚え顔色を悪くし、ノエルがそれを見て心配している。

「古参つてことは強い人なんすね!!」

「そ、そうだ!! あの人の拘束魔法からは誰も逃れなれないのだ!!」

そんな空気の中アスターがデイジーと言う人物に対しクラウスに質問をすると嬉しそうにクラウスが答える。

「ハツ！さ、先に宝物殿に辿り着き勝負に勝つたのは我々だが特別に宝物殿に入ることを許そう――――！」

「何でそんなエラソーなんだこのメガネはアア!? ビーもありがとうございますコノヤロオオ――!!」

「（君たち、いちいち大声出さないと死ぬ気病なわけ……）」

「いざ、宝物殿へ――――！」

と、歩を進めたはいいが

（どうやつて、入るんだろう…………）

「おそらくどこかに暗号か何か…………」

「ガンバレ！ 考えろ！ メガネ！」

「やかましい！」

アスターとクラウスがぎやあぎやあと騒いでいるとラックが宝物殿の扉を触ると、アスターの方へ向き口を開けた。

「この扉、魔法でできてるからアスター。斬つちやいなよ」

「うらアア―――!!」

ラックの言葉通り、アスターが扉を斬ると魔法でできた扉は消滅し、宝物殿の内部が見えた。それはキラキラと光る宝物の山だつた。

「うおおおお!! すげええええええええ!! お宝の山だアアアアアア!!!」

宝物の山を見ると皆が思い思いに好きな場所へと行き、魔道具を触っている。アリスはそれを苦笑いで見ながら歩を進める。

見たこともない魔道具に視線を向けながら自身は書物を探す。古代の人々が残した貴重な書物を持ち帰り解析する。それが本職である魔法騎士団の仕事以外の内容、最も無

理のない範囲での労働なのでそこまで苦ではない。

そして、ポツンと置かれた一つの書物を見つけ手に取る。それを慎重に仕舞う。そういえば、と思い炎庭の猫を解除しようとした矢先膨れ上がる魔力を感じ解除を辞めた。

「みんな、逃げ…………」

ラックの言葉よりも早く拘束されていたはずの敵が魔法で攻撃を仕掛けてきた。ユノ、ラック、クラウス、アイリスは敵の攻撃で身動きが取れなくなつた。そして敵は炎属性の回復魔法を使いながら攻撃を仕掛けていた。

「うそ……何あの高度な回復魔法は……それに炎属性!?!?」

魔道士には、火、風、水、地の四大原則のいずれかの魔が宿つていてその魔からもしくはそこから派生した属性の一種類しか使うことができない

「(さつきのダイヤモンドの秘密兵器、あれは単に強いから言つてたのかと、でも違う！あの人……これがダイヤモンドの研究結果つてこと……)」

クラウスとアイリスが敵について考えをしていたその時ノエルが水魔法で炎の回復魔法を消そうと前に立つた。ただあらぬ殺気を感じて止めようと口を開く

「待つ……」

「その炎、私が消すわ!!」

ノエルは敵の攻撃で胸元から大怪我を負い、ミモザの目の前で倒れた。

「ノエルさん!!」

「ノエルーー!!!」

「ノエルさま…!!」

仲間を傷つけられたアスタは無我夢中で攻撃を仕掛けよと走る

「オマエの能力はわかつた、

「その剣があらゆる魔法を碎くなら劍より速い魔法はどうだ?」

剣で相殺できないほどに速い敵の魔法、それを必死に躱していたが敵の魔法のほうが早くアスタは壁に向かってぶつ飛ばされ壁が崩壊した。

「アスターさん…!」

アイリスの悲鳴に近い声とミモザの声で敵はアスタから興味を外しミモザとノエルに狙いを変え歩いていく、その間にミモザはノエルに回復を魔法をかけている。それを見てアイリスは敵に向けて口を開いた。

「ねえ！」

「何を……！」

突然のアイリスの奇行にクラウスが驚きの声を上げる、それを無視しアイリスは敵に向かって話す。

「そこ、危ないよ……」

何を言つているのかわからないのは味方も同じで訝しげにアイリスを見ている、そうしている間にも敵はノエル達に向かって歩いている。

と、突如敵の足元に魔法陣が出現し、炎の渦が敵を呑み込んだ。

「引っかかるつてくれて、ありがとう……！」

ページ11

「何が起きて……！」

「罠^{トラップ}魔法、成功ですね……！」

「いつの間に、あんな罠を」

悪戯が成功したかのような笑顔を浮かべるアイリスに流石のユノも驚きの声を上げた。

「念には念に、罠を仕掛けでおきました。」

「だが、成功するかどうかは……それに我々は魔導書を封じられている。あんな高度な罠魔法を」

「皆さん、宝物に夢中な間一定の条件下で発動するように仕掛けました、ただ魔力の消耗も激しいし、足止めにしかならないから状況的にはあまり変わらないんですけどね……！これがホントムカツク……！」

心底鬱陶しいと言わんばかりにアイリスはそう吐き捨てる。

罠魔法とは、一定の条件下で発動する魔法のことを指す。最悪の場合を想定し、アイリスは宝物殿に入つた直後『敵がとあるポイントまで来たら発動する』と言うアバウト

な条件で罠を設置した。ただし、不慣れな罠魔法に加え広範囲に魔法を設置したおかげで回復魔法とこの拘束を解く魔力しか残っていない上に炎庭の猫を今度こそ本当に解除してしまった

「（クラウスさんの言うとおり、この拘束は魔導書じや壊せない、それにもう罠も突破される……!!）」

その考えは当つたのか敵を呑み込んでいた罠魔法は鉱石魔法により跡形もなく消え去り、敵の姿が見えた。

「オレは一人でいい……オレには強大な魔力があるのだから……魔力のないヤツは弱い……弱いヤツはいるない……！弱いヤツは……消えるんだ……!!」

治療途中のノエルとそれを施していたミモザの前に敵の攻撃が迫つてくる、が、衝撃は来ず代わりにアスタが二人の前に立ち攻撃を斬つた。

「オマエの相手は……オレだアア!!!!」

そう言いアスタが敵に向かつて走り、攻撃を捌くしかし回復魔法がある限り自分には勝機がない、とアスタが考えていたときノエルがか細い声でアスタに向かつて声を出

す。

「……なにやつてるのよ…バカスカ……」

「ノエルさん…！」

「ノエル…!!」

「アンタは王族の私が……認めてあげた下民よ、あんなヤツ……さつさと倒しちゃいなさいよ…アスター…!!」

「おう、任せとけ」

「どけ……そいつを消してやる…!!」

「そんなことさせるかアア…!!」

「オレには魔力がない…!!だけどオレには……仲間がいる…!!」

水の魔力の斬撃で敵を攻撃したアスター、その事実に皆が驚く。本人を含めて

「((どういう事だ…!?)ヤツには魔力が無いはず…!!)」

「(これは……ノエルの魔力を借りた…!?何なんだあの剣は……)」

敵は敵で必死で攻撃を止めようとするが歯が立たずまともに攻撃を喰らつた。

「へへ、よくわからんねーけど、やつたぜ…………!!」

アスターは途中で自身の異変に気づいた、腹部に刺さる敵の魔法の破片が刺さり血を流す。そうして彼はそのまま倒れてしまいノエルが彼の名を叫んだ。

「ダメだ……オマエみたいな甘いヤツが……オレに勝つてはダメなんだ：!!死ね：!!」

敵の攻撃に対しこちらは拘束それ身動きができず何もできない、しかし無情にも敵はアスターを殺そうとする

「(ヤツの炎回復魔法は先程の斬撃で解除されている……今なら止めを指せるというのに……!!)」

「(もう少し……もう少しでこの拘束を解ける……のに……!!)」

「(仲間なんでしょう……あと少しでこの魔法を解けるのに……これじゃ：!!)」

(((間に合わない…………)))

振り下ろされる剣に対して間に合わない、追いつけない、しかしユノだけは無理矢理拘束を解いた。

「アスターああーーー!!」

「（オレの魔導書のどの魔法を使つても間に合わない……こんなところで……死なせない！！！」

ユノの気持ちに答えるかのように小さな女の子が現れ、そして息をふうと敵に向けて吹きかけるととてつもない威力の攻撃が敵を襲つた。壁にはクレーターが出来敵はそのまま気絶した。

「ユノがやつたのか…!? 一体何を…!!」

敵が倒されたことにより拘束魔法が解け3人は開放された。

「今度こそ、倒した…!!」

「何なの、あのデタラメな強さは……（これがダイヤモンドの力、これに毎回手間取つてちやクローバー王国は負ける……）」

ユノとアスタの魔導書にはそれぞれ新しいページが追加された、それ自体は喜ばしいのだが…。魔宮全体が地響をお越し、亀裂が地面を走り始めた。
「ミモザ…！ 私はもういいから…アスタをお願い…！」

「は、はい！」

ミモザはアスタの治療のために走り出すその瞬間、浮いていた岩が崩壊を始めた。

「これ……は…!!」

「魔宮が……崩壊する…!!」

風創成魔法　　“天つ風の方舟”

「みんな乗れ：脱出する!!」

ラツクがアスタを抱え、アイリスがノエルを運びユノの魔法が浮上を始めた。アイリスはノエルの側で治りかけのケガを見た。

「ノエルさん、まだケガを…！」

「アスター程じゃないわ、平気よ…」

「いえ、ケガを甘く見ないでください!!」

炎回復魔法　　“燈灼ノ城”

ノエルを包み込むように薄い膜が張られノエルを治療し始めた。

「これは回復魔法…？」

「はい、ミモザさんは劣るけどこのケガなら治せますっ」

安心させるために笑うアイリス、その隣では治療をしているアスタがいる。アスタは

辛うじて残っている意識で敵である筈の彼を心配する旨の言葉を発する。

「あ……いつを……」

「喋らない方が……！」

「……アーツも助けてやつてくれ……」

「な……何を言つているのだ!? ヤツは我々を殺そうとした敵国の者だぞ……!」

「……オレ達は……魔宮を攻略しに……来たんだ……敵を……殺しに来たんじや……ない

……」

それだけ言うとアスターは寝息を立てて寝てしまった。ユノがこちらに向けて視線を向けるがアイリスは「ムリ」と言う意味で視線を向けて首を振る。それだけで頭のいい彼は前を向いて魔法を進ませた。

「もうムリだ! 間に合わん……行くぞ——!」

しかしクラウスの声も虚しく魔宮は崩壊を始めどこへ行けばいいのかわからないほど崩壊が進んでいた。

「右だよ……!! 僕が案内する!!」

「はい！」

魔力感知が得意なラックの元ユノは魔法を操作する。崩壊する瓦礫がアイリス達を襲うが、それを前に立つクラウスとラックが魔法で壊す。

鋼創成魔法　　〃旋貫の激槍〃

雷魔法　　〃迅雷の崩玉〃

!!!!
((((絶対に……アスタを……死なせまん……!!生かしてここから出る……
))))

ページ12

「助かつた――……！」

ドゴオン、と言う破壊音と共に彼らは脱出を果たした。ユノの指示のもと安全な場所へ運ぶ。運んだ先ではミモザの治療の甲斐あつてアスタは意識を戻した。

「あいたたた……」

「フン、無事ならいいのよ、バカスカ」

「信じられませんわ、とんでもない回復力」

「丈夫なところだけがコイツの取り柄だから」

「何だとユノおぐぐぐ！他にも何か言うこといろいろあるわああ、いででで」

アスターの同期が思い思にアスターの無事を驚き、安堵するのをクラウス達は微笑らしく見守っている。

「魔法帝になるまで死んでたまるか……！」

「魔法帝になるのはオレだ……！」

誓いの言葉のように言う二人にクラウスが声を掛け近寄る。また小言を言うのでは……と心配をする周りをよそに彼は距離を詰めた。

「オマエら……」

「クラウス先輩」「本当に……」

「すまなかつた!!」

そう言いながらクラウスは二人を抱きしめた。そのあまりにも彼らしくない行動にミモザは手で口元を押さえ、残り3人は口を開きポカンとしてしまう。

「下民だとオマエらを認めなかつた自分が恥ずかしい!! オマエ達はクローバー王国の素晴らしい魔法騎士だ!!」

「メガネのダンナ…イタイ…」

「先輩、暑苦しいです…」

クラウスの渾身の叫びはどうやら後輩たちには届かなかつたらしくそれぞれ的にはずれな言葉を口にした。それに対しクラウスはやはりと言うか反論を繰り広げ、それはやがて周囲を巻き込んで行つた。

「よし……」

それだけ言うとアイリスはいるであろう人物を探す。先程感じた魔力、あれはシンソンを拗らせた金色の団員のモノだ。うろうろと瓦礫の山を器用に歩き進める、お目当の団員は瓦礫の山に行儀悪く胡座をかけて座つていた。それを視認しアイリスは彼に向かつて口を開いた。

「金色の…それも古参の方がこんな外れの魔宮に何か御用でしようか…？」

「ん…？ やあ、アイリス」

「ご質問にお応えください、デイジー・ハーミイ殿」

「そんな硬つ苦しく呼ばないでくれよ、愛しの妹よ」

ああ…どうしようど、こかのナルシストを思い出して腹が立つてきた。

そんな彼女の思考に気づかない彼にアイリスは更に腹が立つてきた。最早やけくそでアイリスは叫んだ。

「ああーー!! 貴方がどうしてここにいるのかこの際知りません!! こちらには重症者がいます、ついてきてください!!!」

「そうか、案外してくれ」

真面目な回答をしたディジーにアイリスは意表を突かれるが「こちらです」と言い彼を案内する。未だ賑やな談笑の声がしている彼らの元へつくと初めにクラウスが反応

した。

「デイジーさん、どちらにいらしたのですか…！」

「やあ、クラウス。任務達成おめでとう」

柔らかな笑顔を貼り付けた彼はクラウスに言う。その隣に座るミモザとユノに対しても彼はにこやかに言い、次にノエルとラックに向ても同様に、そして最後にアスターに視線を向けた。

「キミが黒の暴牛の新人か。始めてまして、デイジー・ハーミイだ。クラウス達と同じ金色の夜明け団所属の団員だ。」

「金色の…つてことはユノの先輩つてことですかああ!?」

「そうだね、今年は優秀なこたちが沢山入ってくれて嬉しいんだ。さて、アイリス。君の言う重症者はそこの彼だね？」

アスターが下民だとすぐに気づいていたはずなのにデイジーは顔色一つ変えることなくアスターに接し、そして怪我人を確認した。

「…あ、はい。そこのアスターさんとノエルさん、他はみんな軽傷なので…自然完治でも問題ないと思います。」

「報告、ありがとうございます。これより金色の夜明けはアジトへ戻り休息取り次第報告書を纏め提出してくれ。黒の暴牛の諸君、君たちはどうする?」

「わたしたちもアジトへ戻ります」

デイジーはクラウス達に支持を飛ばし、アイリス達に視線を向けるとそう言つた。それを聞きアイリスは即答するとデイジーは笑いながら魔導書のページを捲る。

炎創成魔法　　『業火ノ白鷺』

綺麗な白鷺が現れ、軽々とアイリス達を乗せる。乗せ終わるとデイジーがトントンと白鷺の体を叩く。すると白鷺は羽を広げ天空を飛んだ。

天空を飛ぶ白鷺の先頭にはデイジーが真ん中にはアスタ達がそれぞれ天空の旅を満喫していた、中々味わえない空の旅をアスタは「うおおおおお!!」と叫んでいるとクラウスが「傷に触るぞ」と注意をしてそれを他の面々が楽しげに見ている。団の垣根を超えて楽しむ彼らを横目にアイリスは前にいるデイジーへと話しかけた。

「デイジーさん、どうして今回貴方はここにいらしてたんですか、」

「ん？」

「答えて……いつつもわたしを追いかけ回して、何がしたいんですか！」

泣きそうな、しかしここか悔しそうな表情で自分を見るアイリスにデイジーは心の中で悔しさを滲ませる。これが自分たちが招いた行いの結果なのか、と同時にもう自分を許してくださいのだ、と彼女に向き直り微笑んだ。

「妹に似ている、と最初に言つただろ？いい加減君も気づいているはずだ、オレと君は血の繋がつた兄妹だと…」

「さあ…ね……知らないよ…貴方なんて」

いつもとは違うデイジーの言葉、軽はずみな言動と突拍子もない行動で煙たがつていたが彼が自分の兄だと言う事実は昔から気づいていた、気づいていながらそれを事実だと認めなくなかった。認めたら今までの悔しさ、怒り、悲しみ、その感情の行き先を失ってしまう、そういう自分の我儘がもしかしたら彼を悲しませていたかもしれないと今になつて気付いてしまった。

デイジーに背を向けアイリスはそう口にした。

それを聞きデイジーはにこやかに笑うと纏まつた彼女の髪を強引に撫でた。纏まつていた髪はデイジーが触つたおかげでリボンが取れデイジーの手元に落ちオレンジの綺麗な髪は風に揺られはためて いる。

「兄さまは…昔から強引だよ…」

ポツリと溢れた声は気づかないふりをしよう、リンゴのように真っ赤な妹の姿を

「（）でいいわ」

そのノエルの言葉でデイジーは白鷺の体をトントンと叩き停止させた。優雅な天空の旅は終わりを迎えた。白鷺は地面へと足を付いた。

暴牛のメンバーは白鷺から降りて別れの言葉を言つたあと、白鷺は地から足を離れ再び天空へと舞い戻つた。

それを見送り彼らは黒の暴牛のアジトへと入つた。

いつものメンバーがいつものように寛ぐのを見て彼らは家に帰つてきたかのような安心さを貰う。

「あ、おかえりい〜」

酒瓶片手にバネツサがソファから身を乗り出し、チャーミーが「おかえりなのら〜」と言いながら自身の魔法で料理を作り始め、マグラが「お前らアーチよく帰つてきたなアア!!」と叫び、ゴードンが聞き取れないくらいの声でブツブツとグレイがプシュウウと巨漢の体で立つている。

「アイリス!!」

バタバタと騒々しい音を立てながら彼は階段を降りてきた。あまりの騒々しさに周りの面子も顔をしかめる。やがて騒々しさの原因は姿を表しこちらの様子を見ると抱きつく勢いで走つてくる。

「フインラル……」

アイリスの口から己の名を聞くと彼は走り出し彼女に抱きついた。フインラルがアイリスに抱きつくるのを彼らは日常の光景の如く普通に見ていると新人二人は「はつ？」と言いたげな目で周りを見る。

「アイリス!! 心配したんだ…！」

「フインラル…い、 痛いってば」

「あ、 ゴ、 ごめん…」

どうやら力いっぱい抱きしめていたらしくアイリスから苦情を言われたフインラル

は早々に彼女を離した。その横でアスターとノエルがバネツサに詰め寄っている。

「ちよ、 ちよつと、 あの二人付き合つてるわけ!?」

「え、 ええええええ!? マジつすか!?」

「違うわよ。あの二人あんないい雰囲気出してるけど別に付き合つてないわよ。アイリスが黒の暴牛^{ウチ}に来てからあんな感じなのよ、ていうか、毎回アイリスが任務から帰つてくるとあんな感じだからいい加減付き合いなさいって感じなのよねえ…」

新人二人に説明をするバネッサは明後日の方を向きながら酒瓶をグビッと飲み干す。納得の行かない顔の二人は目の前でバネッサが戻しているのを見て退避を開始した。途端にカオスな状況に陥るアジトでチャーミーが「ご飯、できたのらく」と場違いな感じで現れた。

王都襲撃編

ページ13

1週間後

「アイリスさん、そろそろ休憩を入れませんと」

「いえ、これが終わったら休憩を入れます」

王都、それも魔法騎士団の本部にある一室で大量の書物に囲まれメガネを掛けた一人の少女が1週間その一室に引きこもり古代文字と格闘していた。

1

力オスな暴牛アジトにこれまた力オスな人物が現れた。その名もヤミ・スケヒロと言いう。

またの名を破壊神の異名を取る彼は帰還してきた4人に向け「お疲れさん」と言いアイリスの頭を掴むとフインラルに空間、出せと迫った。

何をされるのか見当がつかない一同にヤミが「コイツの力が必要なんだ」と一言い

い開かれた空間に投げ飛ばした。空間の転移先は最早見慣れてしまつた国民の憧れ魔法騎士団本部。

そこの一室に数年前から使つてゐる部屋がある、最早彼女だけの部屋と言つてもいいその部屋には数人の人間が頭を抱え彼女の姿を見て喜んだ。曰く、自分たちでは解読不明な古代文字に苦しめられ助けを求められたと言うこと。

7割型終わり、部屋にはアイリスと魔法帝の側近、マルクスがいる。無言の空間にペンを走らせる音だけが響く部屋にとてつもない音を纏わせながらその人物は入つてくる。突然の訪問者にマルクスは座つていた椅子から立ち上がり警戒するがアイリスは無視を決め込み口を開いた。

「なんの御用でしようか、デイジー兄さま」

「アイリス、今日暴牛の子たちやクラウス達が魔法帝に魔宮の報告をするんだ。で、その後戦功叙勲式をするのだが来ないか？」

兄の來訪に進めていたペンを止め、振り返る。その顔には不機嫌です、と書いてある。

「黒の暴牛は出ないけど、なんですよ」

「いや、その…式にはレオが来るんだ。」

「うわあ…………まじで？」

「大真面目だ、式の前にこの部屋に来るとフエゴレオンさんが先程言つていてな。恐らくもう来るだろう……」

兄妹の会話にマルクスは入る気がないのか、視線をそれぞれの団から来た報告書に戻し、開けられっぱなしの扉はそのままになつていて。先程から何やら騒々しい音と感じたことのある魔力にアイリスは頭を抱える。

「アイリスはここかああああ!!!」

叫びながら入ってきたのは紅蓮の獅子王団団長の弟で王族ヴァーミリオン家の一人、レオポルド・ヴァーミリオンだ。自身の名を叫びながら入つてくる辺り用事があるのかわしだろ、と早々に逃げることを諦めた。

「なんのよう、レオ」

「おお！ 我がいとこアイリスよ」

彼の強引な行いには慣れているのかアイリスは椅子から立ち上がる。1週間前、目の前の人間を兄と改めて認識したあと諦めたのか、はたまたけじめなのか彼女は訪れるいとこや同僚たちに以前のような冷たい目を向けず話すようになつていた。その事実にデイジーは感極まつていて。その目が若干潤つてるのは恐らく幻だろう、いい年した男が泣くとかキモいので。

「これから戦功叙勲式なのだが、お前も来い!!」

レオポルドが部屋を訪れた、いや訪れる前から言われるであろうと予想していた言葉にアイリスはため息をついて「わかつたから、ちょっと待つて」と言い片付けをし部屋を出た。

「そう言えば、ミモザは金色の夜明けに入つと聞いた、この前の任務で一緒だつたのだろうー・どうだつた」

「元気によつてましたよ、仲間とも仲がいいみたいで任務もちゃんとやつてましたよ。まあ、予想外なことだらけでしたけど……」

「おおー！それと黒の暴牛には面白そうな奴が入つたんだと耳にした！」

前を歩く赤のコートに黒のローブを着た少女と紅蓮のローブを着た少年が楽しげに話すのを見てデイジーは過去を懐かしむように見ていた。幼い頃はよく二人で追いかけっこをし彼の姉に一緒になつてしまふかれていたのを思い出す。

ヤベ、思い出しだけでなんだが気分が悪くなつてきた。

そう言えば、と思い出す。1週間前は暴牛のローブを着ていた妹だが今はローブの下に赤のコートを着ている。何かあつたのだろうか。それは妹の隣を歩くレオポルドも

だつたらしく彼女に問い合わせている。

「アイリスよ、以前会った時はコートなど着ていたか？」

「家的には、追放されてるけど……まあ一応……わ、わたしも家の1人なのかなあ……つて貴族だし……」

少し困ったように笑うアイリス、その質問の問いはあまり予想していなかつたらしくレオポルドは「なるほどな……」と首を縦に振り自分は、というと彼女に詰め寄つた。

「アイリスのその格好、似合つてるからやめないでくれ!!!」

「来るな!!!兄さまのバカーネツ!!!」

突然現れた兄の姿と自分に詰め寄り話しかけるデイジーを見て思わずアイリスは炎魔法“焰の円爆”で彼に攻撃をしてしまつた。ハツ、と気付いたときには口から煙を出して、がそれも一瞬で彼は頭を横に何回か振つてすぐに元通りになつた。

（うわ、気持ち悪い……）

いとこ同士、同じ思考だつた。

「お前たち、何をしている」

この収集がつかない空間に凜とした声が前からした。

その声を聞きレオポルドがいち早く反応し、「兄上！」と嬉しそうに言つた。

「フエゴレオンさん、すみません。妹に会えて羽目を外しすぎました。」

「そうか、アイリス。久しいな」

途端に纏う空気が変わるデイジー。言つてることがアレンので今すぐ蹴飛ばしたい衝動に駆られた。が、フエゴレオンに話しかけられ慌てて背筋を伸ばした。

「は、はい。フエゴレオンさまにお会いできて光栄ですっ！」

裏返つてしまつた声に隣にいるレオポルドが豪快に笑い、アイリスがそれに対し囁み付く、

彼らが幼い頃、よく見た光景だ。と兄たちは感慨深くなる。が時間が時間なので急ぎ部屋へと向かつた。

戦功叙勲式をやるために会場には式に参加する団員とその団の団長が集まる仕来りだ。

ほぼ全員が実力者の集まりのこの空間にあとは魔法帝、ユリウス・ノヴァクロノが来れば式は始まる。

「あれは黒の暴牛、あんな野蛮な所がなぜ来ているんだ」

「今日も黒の暴牛は来ないはずじゃなかつたかしら？」

魔法帝を待つ間、参加団員がアイリスを見るやいなや嫌味を彼女に向けて言う。当の本人は気にしていないのか済ました顔でその場に立っている。

「気にしていないのか？」

「別に、あんなの言わせておけばいいよ」

レオポルドの間にアイリスが淡淡と答える。感心するレオポルドを見て何も変わつてはいないなあ……としみじみしていると閉じられていた扉が音を立てて開いた。

ページ14

等級

クローバー王国の魔法騎士にはその者の実力を示す「等級」がある。等級は魔法帝をトップに大きく五つに分けられ、その中でさらに一等から五等の五つに分けられる。年一回開催される叙勲式の際までに規定数の星を取得していると等級が上がり、魔法帝より新しい等級が授与される仕組みとなっている。

黒の暴牛は、もれなく全員、最低の五等下級魔法騎士である。

「では、戦功叙勲式を始めよう……！」

「星取得数7、紅蓮の獅子王団。レオポルド・ヴァーミリオン!! 君に二等中級魔法騎士の称号を授与する!!

兄である獅子王団団長と同じく君の炎魔法の威力は圧倒的だね～～～！ やりすぎには要注意かな

「悪に容赦など必要ありません」

「星取得数6、碧の野薔薇団。ソル・マロン!!三等中級魔法騎士の称号を授与!!男性に負けない行動力と独創的な土魔法は凄いけどちょっと自由すぎるかもね!!」

「私を縛れるのは姐さ…………団長だけです」

「星取得数9、銀翼の大鷲団。ネブラ・シルヴァ。五等上級魔法騎士の称号を授与する!!君の霧魔法でつくる巧みな幻はすごいね♪!ただその幻で敵を必要以上に弄んで噛みつかれないようにな」

「ゞ忠告有難うゞざいます…フフ」

「星取得数6、銀翼の大鷲団。ソリド・シリヴァ。三等中級魔法騎士の称号を授与する!!魔法の操作性の高さは流石だけどあんまり自分の力を誇示せずまわりと協力できるともっと良いんだけどね!」

「肝に銘じておきます…クク」

「星取得数11、金色の夜明け団。アレクドラ・サンドラー。四等上級魔法騎士の称号を授与!!君の勤勉さと柔軟な魔法には驚かされるよ!たまには肩の力を抜いてみてもいいかもね!」

「有難きお言葉！」

「星取得数8、金色の夜明け団。シレン・ティウム。一等中級魔法騎士の称号を授与!! 雄弁に語る君の魔法とは裏腹に無口な君はもう少し自分の意思を口に出せたら尚グッド!!」

「…………御意…………」

「星取得数7、金色の夜明け団。ハモン・カーセウス。二頭中級魔法騎士の称号を授与!! 見た目からは想像できないあの魔法にはさぞかし敵も面食らつたろうね!!」

「感謝でござります。才ホホホ」

「みんな、大義だつたね。さて、これから簡単な席を設けてるから楽しんでいつてくれあ、そうそう…今日は特別ゲストも呼んであるから大いに交流してくれたまえよ!!」

魔法帝による団員の式が終わると彼は参加した団員たちに対してそう言つた。魔法帝の言葉によつて参加団員たちは揃つてこの場には似つかわしくない者たちに視線を向けた。

「はあ……」

デイジーとアイリスは揃つてため息を吐くと魔法帝は「用ができたから抜けるね、みんな楽しんでねくれ！」と言い残し後にした。

「せつかくの式なんだ、どれが食べたいんだ？」

「では、軽いものを」

デイジーは皿を片手に食べ物を取りに行く。

「ノエルさん、この果物美味しそうではなりません？」

一人浮かない顔のノエルに声を掛けるアイリス。声を聞いてノエルははつと顔を上げた。

「あ、アイリス！あなた、一週間もどこにいたのよ！」

「野暮用ですかね：今兄が食べるものを取りに行つてるので来たら分けませんか？」

「しょ、しようがないわね！私は王族だから許してあげるわ！」

照れるノエル、それを見て笑うアイリス。横ではアスタがガツガツと食べ物を食べている。

「卑しい下民が……！」

「なぜ魔法帝はあのような低俗な者を……」

「まったく魔力を感じない……魔宮攻略も運が良かつたにちがいない」

「なんと汚い食べ方：オホホホ」

「ここにいることが不自然だ。場違いなネズミめ」

金色の団員が口を開くと次々とアスターへと向けられた言葉が彼を襲う。が、当の本人は然程気にしてはいないらしい。

「うーーん、散々な言われようですな。まあ、もう慣れてるけど」

「下民なら貴殿らの団にもいるではないか

四つ葉の魔導書を持ち祭り上げられ団に乗っている下民がな……！」

「レオ……何やつてるのよ……」

「アイリス、戻つたぞ……つてやつぱりこうなるか」

「だから、來たくなかつたのよ」

皿に料理を盛り付け帰つてきたデイジーはその場に流れる空気に小言を漏らしながら皿をアイリスとノエルに渡す。

「え…わたし」

「あなたにもと思いましね。妹はあなたと食べたいようなのですが」

「ノエルさんも一緒に食べませんか？」

「いや、この空氣で…？」

空氣の読めない彼らにノエルは思わず突っ込んでしまう、横ではレオポルドと金色の団員、アレクドラが睨み合っている。

「先の魔宮攻略任務……オレの方が上手くやれた！」

「大した自信だな……紅蓮の小僧。別に我々はあるような下民に期待などしていない、ヴァンジヤンス様の……金色の夜明け団の理想を体現するのは我々だ……！」

「お言葉ですか……」

「オマエもだ、クラウス！ オマエ程度の実力の者がここにいて恥ずかしくないのか」「はつ…」

「ミモザ！ オマエは魔宮では早々に負傷し戦線から離脱したそうだな。王族であるヴァーミリオン家の者が笑わせる……！」
「申し訳ありません……！」

「そしてオマエが一番気に食わない！」

クラウス、ミモザと立て続けにアレクドラは二人の事を罵倒すると彼はアイリスを指差しこう言つた。

「王族でも貴族でもない貴様がなぜデイジーさまと親しくしている!!おまけにこの騎士団本部に出入りしているだと?!自分の身分を弁えろ!!黒の暴牛の娘!!」

「まあ……前々からそう思う人は結構いたよね。わたしが言つたところで誰も信じないだろーし。ここは穩便につと……）……」

ニコリと無言で微笑む。それだけでアレクドラはグッと押しだつてしまう。得体のしない化け物が何も言わずにそこに鎮座している、そういう風に感じてしまうのだ。

そんな事を考えてしまったアレクドラの目の前ではアイリスの隣にいるシスコンが今にでも飛び出しそうな勢いなのをアイリスが彼の靴を踏んでギロリと睨んだ。

「少しは抑えて、こんな所で問題を起こしたら大変だよ」

「あ、ああ……わかってはいるんだかな」

アイリスの言葉にそう返すデイジーだが、何かに警戒しているのかその顔はいつものおちやらけた顔ではなく眉間にシワがよつており、アイリスは驚き顔をしかめてしまつた。それを見てデイジーが慌てて「すまない」と言うのと同じタイミングでノエルに向かって嫌味たっぷりの声が聞こえた。

「ククツ…、いやいや一番の場違いな役立たずはア～～オマエだよなアア～～??
なアア、ノエル～～。魔力の操コントロール作も口クにできない前代未聞の恥晒しがよオオ～～
～！」

「ソリド……兄様……」

「シルヴァ家から追放同然だつたつていうのによくノコノコと王貴界に戻つて来られた
ものねえ……！」

「ネブラ姉様……」

「一回程度の成功で舞い上がつてわざわざシルヴァ家の名に泥を塗りに来たのか……?
この場はお前に相応しくはない。去れ、出来損ないめ……！」

「ノゼル兄様」

ノエルの兄、姉が彼女に向かつてそう言う。それを聞きノエルはだんだんと顔を青く
させ長兄のノゼルの言葉に彼女は振り返り来た道を戻ろうとする。が、その腕をアスタ
が捕まえこう言った。

「こんなヤツらから逃げる必要ねー…………!!」

「アス……タ」

「こんなところに呼ばれるくらいだからスゲー奴らだと思ったのに他の奴らと変わらねえじゃねえーか……!!」

この場にいるのは大半が貴族か王族である。対して彼は最果ての村出身の下民、それも魔力が全くなアスターい下民。そう、普通なら怯えて逃げてしまふかもしれないのに彼は貴族に対して声を上げた

「相応しいとか相応しくないと知るかーーー！見とけよ、オレは必ず…………」

砂拘束魔法　　“砂の匣”

アスターの声は続かなかつた。代わりにアレクドラの拘束魔法が彼を拘束した。

「そこまでた、不届き者めが……キサマは喋ることも許されない。黙れ…………！」

アスターの武器は魔力を消費して魔法を放つことではない、アスターの武器は魔法を打ち消す剣だ。

ズツ、と剣を振り回し拘束魔法を解いたアスターは高らかに宣言した。

「黙らん!!!!」

「コイツ……!?」

「いいか、コンチクショー！オレは必ず全員黙らせてやる!!!!」

“実績”を積んで……魔法帝になつてオマエら

ページ15

「魔法帝に……なるだと……!?」

そう高らかに宣言したアスタだが彼を知る人間、特にクラウスは顔にバカモノ、と書いてある。横にいるユノは「やつぱり……」と口にしミモザは驚きの表情を顔に出し、デイジーは呆れ、アイリスはニコニコと笑っている。

「面白いなあ：アスターさん。けど、プライドの塊にとつては結構屈辱的かな……」隣のデイジーと目配せし、いざという時に助けられるように準備をする。

「クツ……クク……クククク」

「フフフ」

「「笑わせるな!!」」

ソリド、アレクドラ、ネブラはそう言うと魔法を発動させた。

水拘束魔法　　『海蛇の巻縛』

霧拘束魔法　　『霧蜘蛛の縛糸』

蛇の形をした水魔法と細かい蜘蛛の霧魔法がアスタを襲うが剣でそれを斬る。それ

を見てアレクドラは拘束魔法ではなく創成魔法でアスタを拘束した。

砂創成魔法　　『砂剝の番兵』

砂の鎧がアスタを拘束した。ハツとしアイリスはデイジーを見ると彼は柔らかな笑顔を浮かべ頭を撫でてきた。

「兄さま、アスターさんが……」

「いいから、後輩を信じろ。アイリス。仲間だろ？」

「でもつ……」

「大丈夫。彼は平気だ」

「仲間なんて、結局他人じゃないっ!!」
「なんで、そんなに信頼できるの……。喉まで出かかった言葉を飲み込みアスターを見る。」

仲間も、友人も、家族だって結局はどこまで行つたつて『他人』だ。それを同じ騎士団の仲間、という認識のアイリスとは違い彼らは仲間というくぐりの上に新たなくくりを作り『家族』のように接していく。

それが昔から苦手で、一線を引いてきた。

「仲間だ!!!!」

「オレも勝手にアンタを助ける!!!一人になんかさせるかアアア!!!
アンタがオレをどー思つても知らん!!アンタはオレの仲間だ!!!」

】

あの時、彼はそうラツクに対して言つていた。それはまるで自分アイリスに対しても言われて
るかのように感じてしまった。

「わたしはっ……」

少しさは歩かなきや。そう思つてもすぐには動き出せないかもしない。けど、
「お前の気持ちも…少しさは分かる。けど、彼はお前と一緒の団の仲間だろ? 今すぐとに
は、言わない。けど、信じろ」

「はいっ……!!」

頑張らなきや、と思う。

だから、まずやらないといけないのは…
すつ、と手をかざす。誰にも気づかれない程度に魔力を絞る。

「オイオイ～～～、何生温いこと言つてんだ金色さんよオオ、こういう団に乗つたヤツに

は身体に覚えさせないとアア。二度とおいたできないように…………

水創成魔法　　“聖水の凶弾”

砂の鎧に拘束されたアスターにソリドが水の弾を創り攻撃した。それを見てノエルが「アスターーー！」と叫ぶが、アスターは魔導書からもう一つの剣を出し聖水の凶弾をソリドに向かつて跳ね返した。

「ノエルに……謝れ!!!」

自分の魔法を喰らったソリドはそのまま地面に叩きつけられる、と皆思ったその時アリスはかざした手を握りソリドを炎の渦が拘束した。拘束された本人はキッとアイリスを睨む。深呼吸をし、ソリドを睨む。

「グツ……！これは貴様か!!」

「王族ともあろうお方が下民一人に対してそこまでムキになる必要性あります？」

「貴様っ!! この拘束魔法を解け!!」

「あら、わたし今拘束魔法なんて使つてないですよ。まあ……魔法帝が折角設けて下つた場を汚したあなたたちはこれから先大変そうですね。」

「確かに、魔導書なしの拘束魔法だけでもそちらの魔法騎士よりかは腕が上がつている。さて、どう止めるか……言つたオレも同罪かな……（れ）」

「これ以上わたしの仲間に對して手を上げるのでしたら、わたしもそれ相応の対応を致します」

「この下民風情共がアアーー!!!!」

スツ、と表情が消えソリドに言う。彼はそれだけでぶるりと震え叫んだ。彼は拘束されている中で魔法を発動しようとし、アスターも来る攻撃に構えた。その瞬間、空気がピリつく程な圧倒的なオーラが場を支配する。

シリド

「（の方は……）」

「ノゼル……兄様……！」

「下民如きにそう容易く魔法を使うな……！ 王族に逆らいし下民。どう捌いてやろうか」

銀翼の大鷦団 団長ノゼル・シルヴァ

!!

紅蓮の獅子王団 団長フエゴオン・ヴァーミリオン

それまで傍観していた團長二人が対立するかのように向かい合い会話をす。のと同時に安堵のため息を吐く人間もいたりする、ミモザも安心するかのようにフエゴオンの名を呼び、クラウス達はほつとした顔になる。

「フエゴレオンさん……！」

「ミモザとアイリスから聞いて追った通り、貴様なかなか面白いではないか……よし、喜ベ!!このレオポルド・ヴァーミリオンのライバルにしてやろう!!」

「へ……」

「ヴァーミリオン……」

「ええ、フエゴオンさんとレオポルドさんは私の従兄ですの。」

ヴァーミリオン、という名に反応したユノにミモザが答える。周りは周りで言いたい放題な状況になつた。

「やつぱり男つてバカですね！姉さん！」

「はしたないぞ、ソル」

「すみませんっ、姉さん！」

「団長と呼べ、ソル」

「すみませんっ！」

「騒々しい方ばかりですね、まったく、オホホホ」

「……」

「ユリウス殿がこの場にいることを許した者だ、下民とは言えど多少は認めてやつてもよいのではないか？」

「……まさか王族のものからそのような言葉が出るとはな……ヴァーミリオン家もお優しくなつたものだ。天空を舞う鷺が地を這う虫ケラをどう認めろというのだ……？」

和やかな空気が流れる中で団長一人は未だに殺伐とした空気を醸し出している。壁が、窓が悲鳴を上げるかの如くガタガタと揺れ一切の言葉を放つ事もできない空間がそこにはあつた。さて、どうしたものか……とデイジーが考えていると外から扉を壊す勢いで一人の魔道士が入ってきて、こう言つた。

「たつ…大変です!!! 王都が、王都が襲撃されています!!!」